



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_south/944/



エリア

高雄市

テーマ

歴史

民族

美濃客家文物館

1990年代の美濃を象徴する文化の メモリアルホール

美濃客家文物館(以下、文物館)は2001年4月に開館した、美濃の客家文化を展示する施設です。展示内容は客家文化や農村文化が中心で、とくに美濃の主要産物であった葉タバコ関連の文化に詳しく、その他にも客家の労働習慣、タバコ小屋の景観、ダム建設反対運動やそれらの文化・歴史をモチーフとする現代アートまでが網羅されています。

学 び の ポ イ ン ト

1.

社会運動と公定台湾ナショナリズムとの融合

文物館の歴史は、1996年に美濃愛郷協進会(以下、協進会)が、当時の高雄市政府(高雄県立文化中心)から文物館の設計および企画を委託されたことに遡ります。協進会は美濃に予定されていたダムの建設反対運動のため、1994年に作られた社会運動団体ですが、ダム建設に反対する理由(対抗言説)を構築する上で美濃の客家文化の重要性を訴えており、その言説は民主化運動の熱冷めやらぬ当時、勃興する市民社会の台湾ナショナリズム、とりわけ台湾客家ナショナリズムと強く結びついて、台湾全土に美濃の名声を広めました。

2.

社会運動団体による公設民営案とその挫折

文物館の企画過程では、高雄县政府文化局(当時)と協進会のあいだで協進会側が自由に運営できるようBOT(Build Operate Transferの略、日本でいう指定管理者制度のような制度)で協進会が運営するという案がありましたが、美濃出身の県議会議員の反対に遭い、文物館は結局、县政府文化局の管理の下で開館しました。2010年の縣市合併後は、高雄市客家事務委員会がこれを引き継いでいます。文物館には、対抗言説の一環として美濃の客家文化を政府との関係を築きながら補助金で具体化していく協進会の努力と、それによって構築された台湾客家文化が公定ナショナリズムとして政府に受け入れられていく過程が融合しています。